網膜硝子体の手術。偏光眼鏡を用いることで、大きな画面に映し出される映像を立体的に見られ、大人数で共有できるので「学生の指導にも適している」と木村教授。

（上）画像や眼球模型を用いて、わかりやすい説明を心がけている。
（下）「車の運転に合ったものを」や「楽器を演奏するので譜面がよく見えるレンズに」といった患者の希望に添えるよう、スタッフと相談しながら眼内レンズを選択している。

Ophthalmology

自らが近視の診断を受けたことで近視のメカニズムに興味を持ったのが医師を目指したきっかけです。旅行が趣味で、昨年は北海道の函館から札幌をドライブしました。また大学時代に空手を始め、現在は母校で監督も務めています。

木村 修平 部長
Kimura Shuhei

■ 専門医
日本眼科学会眼科専門医

患者に最適な治療を提供するため、医師や視能訓練士が集い、毎週カンファレンスで情報を共有している。

医療最前線
>>>vol.103
川崎医科大学附属病院
眼科

Report!

繊細な手技と高い技術力で、眼疾患から「見える」を守る。

小児から高齢者まであらゆる眼疾患に対応。

「緑内障やドライアイの点眼処方などの一般的な眼科診療に加え、専門性や緊急性の高い眼疾患、糖尿病や高血圧といった合併症リスクが高い眼疾患の患者さんに対して、大学病院ならではの他科と連携した総合的な診療を行なっています」。そう話すのは、眼科を率いる木村修平教授。同科が扱うおもな疾患は、斜視や弱視のほかに、木村教授が専門領域とする白内障や網膜硝子体疾患がある。

白内障は「カメラのレンズにあたる水晶体が濁る病気」。その治療法は、眼の中で水晶体を砕いて取り出し、代わりになるレンズを埋め込む手術。「常に、この患者さんが自分の家族だったらと思いながら治療にあたっています」と話す木村教授が、白内障の治療で重視しているのはレンズ選び。眼内レンズはピントが最も合う距離が一か所だけのため、それぞれの患者の生活ぶりやどういう時に一番見えるようにしたいかといった具体的な希望をしっかりと聞き取り、一人ひとりに適したレンズを推奨している。また、白内障は高齢者の病気というイメージを持つ人も多いが、生まれながらに水晶体が濁っている先天白内障もあるという。「視力はきれいな映像を繰り返し見ることで発達します。そのため、お子さんの場合はできるだけ早く手術で濁りを取り除き、可能であれば眼内レンズを入れます。術後は眼鏡で矯正しつつ、弱視トレーニングを続けることが大切です」。同科を受診する先天白内障の子どもの診察・治療をおもに担う木村教授は、「子どもの眼は大人と比べて小さいうえ、そこに大人用の眼内レンズを入れなくてはならないので、細かい工夫がいくつも必要。難易度が高い手術です」とも。

いっぽう網膜硝子体疾患には、網膜剥離をはじめとするさまざまな疾患がある。なかでも木村教授が長年取り組んできたのは、光を感じる神経の膜（網膜）の真ん中にある黄斑という部分に膜が張る黄斑上膜や、同部分に穴が空く黄斑円孔。いずれの外科的治療も厚さがわずか〇・二ミリほどの網膜を扱うため、繊細な手技が必須。また、加齢黄斑変性症は日本の失明原因の第四位（※1）。加齢によって黄斑の視細胞が傷んでいき、時間の経過とともに視力低下が急速に進行する場合もある。見え方の異常を感じたら、すぐに医療機関を受診する必要がある。「眼の手術と聞くと怖い印象を持たれる方が多いです。患者さんの不安を少しでも軽くするため、手術中はできる限り声をかけたり、術後の外来では経過を詳しく説明したりしています」と柔和な笑顔を浮かべる木村教授。その笑顔が患者の不安をとり除く一番の特効薬かもしれない。

お問合せ
川崎医科大学附属病院
倉敷市松島577
086-462-1111
https://h.kawasaki-m.ac.jp

※写真は取材用に撮影したものです　※1…出典元／日本眼科学会のホームページ https://www.nichigan.or.jp/public/disease/name.html?pdid=52&utm

■2026年4月25日号掲載　本文中の医学情報、写真は掲載当時のものです。